

革命家・
労働運動家
列伝

樋口篤三遺稿集【第1巻】

同時代社

中国
農村・
林大
政治・
黄井
・石

証言 樋口篤三を体験して

戸塚秀夫

はじめに

戦後日本の労働・社会運動に身を投じて六〇年余。想像を絶する貧しさにも負けず、また度々の重病にも屈することなく、息をひきとるまで反戦平和、労働者の国際連帯など、社会変革の夢を追い続けた「職業革命家」、それが樋口さんであった。この人の足跡を辿るなかで、戦後日本の労働・社会運動の実態が、とりわけ「左翼」内部の実態、その正負の両側面が見えてくるように思う。

幸いにして彼は、運動家としては稀有な文章家でもあった。すでに刊行された諸著作だけでなく、ここに収録される文章の検討をとおして、樋口さんについての本格的な「評伝」が現れることを期待している。すでに老境に達した私にその仕事は無理だとは思いますが、長い間にわたって付き合っていたいた者として、私の忘れがたい樋口体験だけは書きとめておきたい。それらはすべて、労働運動についての私の調査過程でのことなので、多少私事にわたることをお許し願いたい。調査研究を職業とする者と運動に専念する者とのあるべき関係を模索している方々に、一つの「教材」となりうるかもしれないと思つて証言することにした。

一 ◆「新左翼調査」のなかで

はじめて樋口さんに会つて話を伺つたのは、一九六九年一月二六日のことである。東大社会科学研究所に着任して間もなく「東大紛争」に遭遇した私は、大学当局による警官隊の導入によつて「紛争」がひとまず収拾にむかうなかで、大学のキャンパスに登場して激しい主張と行動をくり返した「新左翼」諸党派とは何であるのか、それを調査のテーマにすることは出来ないか、と考え始めていた。労働問題を研究している友人達を誘つて、調査の対象や方法についての議論を始めている模索の段階であつたが、学生時代の旧友安東仁兵衛氏の紹介で現れた樋口さんは、私達の関心を一通り訊いただけで、実に率直に当時の「反戦派労働運動」の実情を説明してくれた。

「一応、共産党の役員で東京スト実業団の代表をやっている」というのが樋口さんの自己紹介であつたが、社会党、総評主導の「格好だけつけている」動きや「労勢拡大と選挙対策」に傾倒している共産党の動きに対して、実力で「決戦」を挑もうとしている「反戦派」労働者達の側でも戦略や戦術での意志統一があるわけではなく、山猫ストライキを拡大していける情勢にはない。労働組合運動の「右傾化」は一段と進行しているが、これに反発する勢力の足並みも揃っていない。組合の枠外での軍事的な決起を追求している赤軍派やその同調者達、組合内部での左派勢力の結集を追求している勢力、組合指導部の統制をのりこえる山猫ストライキの組織化を目指している勢力などがあり、自分はその第三の動きに関わっているが、その動きもまだ微弱なものである、というのが樋口さんの説明の要点であつた。「面接調査」のつもりで設定した会合であつたが、現状をどう位置づけたらよいか、どんな展望がありうるか、といったことについて意見を交換するような懇談会になつた。

全共闘から糾弾の対象にされてきた東大の教員たちが画面にでる面接である。多少の非難は覚悟して臨んだのであるが、樋口さんはそれらしき態度をまったく見せなかった。あとから分かったことだが、彼がリーダーであった共労党自体が分裂する時期に当たっていた。むしろ、自分たちの運動をどう位置づけたらよいか、これからどう進んでいったらよいか、と考えておられたのであろうか。七〇年代は「二〇世紀の四度目の革命的時期になるのではないか」という期待を口走ってはいたが、現状は「とば口」でしかない、という醒めた認識を述べていた。おそらくケラムシを意識してのことだろうが、自分は「政治・社会同時革命」をめざす、それをなせる党の形成を追求したい、ということであった。調査への助言を求めたのに対して、「東大教授の肩書」が障害になるかもしれないが、あなた達の研究は重要だと思うから是非とも頑張ってください、と協力を約束してくれた。反戦派の労働運動全般を知る上では「抜群のオルグ」中核派の陶山健一氏が役に立つはずだ、大阪中電の「マッセンスト」の実態を知る上ではアートの松本礼二氏が重要だ、というようなガイダンスをいただいた。

樋口さんは、自分と異なる党派のリーダーへの接近を強く勧めたのである。全く偉ぶらず、セクト臭も感じさせない人柄に親しみを覚えたことを覚えている。猪俣津南雄の「横断左翼論」は、党派の分裂と対立の渦中にあった樋口さんにとっては極めて適切な提言と受け止められたに相違ない。同じ方向をめざしているのであれば連携するのは当然だ、というのが彼の確信になっていたように思う。

私達の調査報告書⁽¹⁾が上梓されたあとに樋口さんからどんなコメントをいただいたか、残念ながら覚えていない。たがたび、この調査にふれている彼の文章を読んだ記憶はあるが。

- (1) やがて「ニューレフト研究会」と自称するこの調査チームは、中西洋、兵藤剣、山本謙の調査員と私で構成されていた。中西、兵藤の両氏は東大の同僚、山本氏は当時法政大学の教員であった。
- (2) この面接は、陶山健一「反戦派労働運動」(更記書房、一九六九年)が出版された直後に行われた。
- (3) 樋口さんとの「懇談会」から得た刺激は、その年の正月休みに書き上げた拙稿「山猫ストライキと労働組合運動——山猫ストライキの意味するもの」(『現代の理論』一九七〇年二月号)に生かされていたはずである。
- (4) 戸塚・中西・兵藤・山本共著「日本における「新左翼」の労働運動(上、下)」(東大出版会、一九七六年)

二 ◆ 「倒産反対争議調査」とその後

その後数年間は、樋口さんと会った記憶はない。はつきりと覚えているのは、七〇年代後半の二つの場面である。一つは、中小企業の倒産反対争議の現場での樋口さんとの再会。私は一九七三年に初めて二ヶ月ほどイギリスにでかけたが、そこで強烈な印象をもったのは労働党の左傾化と労働運動の戦闘性の高まりであった。とりわけ、合理化攻撃に対して職場、工場の占拠で対抗する闘いが広がっていることに強い印象をうけた。私が訪ねた労働者統制協会(The Institute for Workers' Control)の中心にいた実践的な研究者達は、倒産企業の職場を占拠して自主生産を追求している労働者達への熱い思いを語っていた。

その話を聞いた墨田区在住の時計屋の伊藤博君——私が動めていた定時制高校の卒業生——が「日本で

も似たようなことが起こっている」と案内してくれたのが、全国金属傘下の下町の印刷機械メーカー、浜田精機鉄工所組合の争議現場であった。そこから、ずづるのよう、七〇年代に始まっていた中小企業の工場占拠・自主生産に取り組んでいる諸組合を訪ねることになった。墨田機械、ベトリカメラ、バラマウント製靴の自主生産争議の現場である。樋口さんとの再会はその場で実現した。明らかに「新しい質」の運動が始まっているのではないか、それは何か、それは如何なる意味を持ちうるのか。私は研究者として、樋口さんはオルグとして、かなり深い意見交換をしたことを覚えている。

いま一つは、樋口さんが第三期『労働情報』の編集人になった直後、一九七七年のことである。丁度そのころ、労働組合運動の危機に面して、職場闘争を再建して新しい社会を追求する動きに研究者としても協力しよう、という研究者たちの運動が具体化していた。それが「階級的労働運動の模索」を旗印に結集した「労働運動研究者集団」（以下、「集団」と略す）である。法律、経済、社会、歴史など専攻分野の異なる研究者たち数十人がこれに参加したのであるが、樋口さんはこの動きに注目してくれた。私と兵藤氏が事務局役を引き受けたこともあって、彼の『労働情報』にける思いを聞きながら意見交換の場をもったことを思い出す。その直後に出版された彼の著書『右翼「労働統一」反「集団」と同じ方向をめざしていることを明示したのであった。

ただ、差異は明確であった。樋口さんの本には、運動のオルグとしての激的なアジェンションが込められており、とりわけ活動家の倫理に訴えようとする文章が目立っていた。これにたいして「集団」の諸論文は、大部分、組合運動の活動家がぶつかっている問題についての研究者たちの考察を提供する、というスタンスで書かれていた。さらにいま一つ、樋口さんの本には、労働者の国際連帯、

とりわけ日韓労働者の国際連帯をよびかける文章が加えられていたが、「集団」がその領域に手強い論文を提供する力はなかった。彼は東大社研の労働調査、とりわけ労働争議に関する仕事に関心をもちてはいたが、もっと視野の広い仕事、労働運動全体を見渡せる仕事ができないものが、と考えていたに相違ない。「集団」にも期待はしていたが、結局、十分には満足できなかった、ということだったのであろう。

私自身の反省を含めていうのだが、「集団」は「社会主義は可能か？」など、当面する重要課題についてのシンポジウムを組織して研究者相互の交流をはかっていたが、「集団」が共同で新しい研究の開拓にのりだすという姿勢はとれなかった。その余裕はなかったというべきか、大多数のものは、自分の本来とする研究・教育に専念していたのである。わずかに、数名が全金南大阪の倒産反対争議を支援する意図もこめて、当該地域の労働者、活動家たちの「日常性」にたちこいる調査に乗り出した程度である。「集団」の活動をどう総括するか、なお問題は残されているように思う。

- (5) 私のIWCとの出会いについては、帰国直後に執筆したレポートがある。拙稿「イギリスにおける労働者統制運動」川上忠雄・佐藤浩一編『工場闘争と労働者管理』（社会評論社、一九七五年）

- (6) その意見交換は、拙稿「企業倒産と中小企業労働運動—倒産反対争議に見る新しい動向」（月刊労働問題 一九七八年四月号）に反映しているはずである。とりわけ、拙著『労働運動の針路』（東大出版会、一九八二年）に収録されている「補 倒産争議の調査をとおして」という文章には、樋口さんはじめ、現場のオルグたちとの意見交換が生かされていると思う。

なお、学術論文としては、戸塚秀夫・井上雅雄共同執筆「中小企業の労働争議」（労働関係調査会

編『転換期における労使関係の実態』東大出版会、一九八一年、井上雅雄『日本の労働者管理』（東大出版会、一九九一年）、Christina L. Turner, 'Japanese Workers in Protest' (University of California Press, 1995) などがある。井上氏とターナー女史は同じ頃、同じ対象に興味をもって事例調査を始めたのであるが、日米の若い研究者の接近方法、注目点がこれほど違うのか、と意識させる面白い文献であった。

- (7) 雑誌『月刊労働問題』の編集長渡辺勉氏は、『集団』の活動に注目して、毎号かなりの紙面を提供してくださった。当時は約七千部が発行されている雑誌だと聞いていた。
- (8) 全金南大阪の調査に参加したのは、喜安朗氏の提起に応えた川上忠雄、佐野稔、藤本和貴夫、増田寿男の諸教授と大学院生であった平井隆一氏であった。

三 ◆ 「イギリス労働運動調査」と協同社会研究会

その後樋口さんと話し合ったのが何時だったのか、実はよく思い出せない。おそらく文部省科学研究費による海外学術調査、イギリス自動車・鉄鋼業の工場調査の準備に忙殺されていたのであろう。その調査は一九七八年、七九年に実施されたが、そのあと八〇年三月から八一年九月にかけて文部省在外研究の機会を与えられたので、日本から離れている時期が長かったこともあろう。八〇年代の前半は、七〇年代末に登場したサッチャー政権下のイギリス労働運動の敗北の過程、混迷のさまを両踵を舐めて追いかけることに熱中していた。中曽根政権のもとで強行された日本の行政改革、それが労働運動に及ぼす影響などについて、それを実態調査のテーマにする余裕は全くなかったのである。

さきにふれた学術調査の最終報告書の作成はかなり後のことになったが、日本に戻ってきた直後、私は幾つかの集会でイギリス労働運動の現状についての報告を依頼された。当時の私が強調していたのは次の二点である。一つは、強いとされてきたイギリス労働組合運動も、サッチャー政権に支援された「タカ派」の経営者の攻撃にあつて、運動主体の思想的な弱さを露呈しており、従来の運動思想の批判的な総括を迫られていること。いま一つは、その混迷を乗り越えようとする新たな運動論の模索が行われていること。運動としては、経営側の縮小合理化案に対して「社会的に有用な生産」を提起した大企業ルーカス・エアロスペースでの「労働者プラン」——「ルーカス・プラン」といわれていたが、その運動に注目したいということ。

雑誌『新地平』の主幹増山太助氏の強いお勧めに応じて、その報告を敷衍したのが一九八二年一月から八月にかけて同誌に掲載された「イギリス労働運動の現状」と題する長文の連載論文であった。進行中の学術調査の結果と長期留学中の観察とを結びつけて、労働運動の活動家へのメッセージをこめて執筆したものであったが、真つ先に反応したのが樋口さんであった。その「ルーカス・プラン」の実態をもっと詳しく知りたい、というのであった。迫力のある質問であった。私が手元の文庫や資料を読み込みながら、真剣に回答したことを覚えている。彼のこの関心は八〇年代後半から九〇年代にかけても持続していた。一体、それはどんな文脈での関心だったのか。

当時は読んでいなかったが、一九八〇年代末の論文で、樋口さんは次のように書いている。「私は、従来の「階級的労働運動」路線の発展的転換が必要と痛感していた。労働運動の戦略点を「職場生産点」のみでなく「地域社会」と両輪とすること、労働組合の活動領域を社会的にひろげる、そのためにも七〇年代に大いに発展した生協と結合すること……被差別部落、障害者、女性、……少数民族の

アイスや朝鮮、韓国など外国人労働者、アジア、第三世界との連帯……反火電・反原発を自らの課題として闘った石川県評や電産中国の闘いの普遍化……新たな労働同盟の模索等」「労働運動イコール労働組合ではなく、労働組合、生協等との総合と再生復活であるなどを「労働者宣言」(案)として活動家に討論をよびかけた。だが「それは一方では支持を受けたが、……左翼のある政治グループからは、生協と労働運動の結合などという樋口は、労働運動をまったく知らない、あるいは誤ったものと揶揄された。」

この部分は「労働運動の根本的転換」という小見出しのもとに記されている。つまり、樋口さんは、「一九八二年にそれまでの「左翼常識」では不十分だ」という判断で「労働者綱領」の討論を呼びかけ、一九八五年には、「労働運動の根本的転換」を促す「試案」を発表していたということである。この過程を追体験して考えることが重要ではないか。この頃に樋口さんの運動論は明らかに変化している。そして、運動の陣形を変えようとしている。その変化を正確に理解し、その変化を促している契機、変化を可能にしている契機はなにかと問うことが必要ではないか、と考える。以下、そのために確かめたい二つの点を述べておく。

一つは、八〇年代前半に世界的に起こった組合運動の敗北と後退、それを樋口さんはどう受け止めたか、ということである。中曽根政権下の行政改革が横行される前に、イギリスではサッチャー政権に支持された「タカ派」経営者による組合運動への弾圧があった。当然「強かった」イギリスの労働運動はこれに反撃を繰り返した。その激突の頂点は石炭公社(NCB)の大合理化計画をめぐる炭鉱ストライキであった。約一〇万人の組合員が一年間もストライキを続けるという、未曾有の激しい闘いが組織され、国際的にも大規模な支援活動がおこなわれた。私も学生仲間へのカンパの呼びかけに

加わったが、樋口さんは当時設立されたばかりの「労研センター」の「初代事務局長」として、国鉄民営化反対と結びつけてイギリス炭労(NUM)支援のキャンペーンを組織した。八五年二月にはゲービシャーNUMのリーダー、ジョン・パロース氏を招いて東京周辺だけでなく、関西、九州にまでカンパの行脚をおこなった。しかしNUMの合理化絶対反対闘争は惨敗に終わった。この闘いをどう総括したらよいのか。

八五年の夏に私は再度イギリスにでかけ、パロース氏の案内でNUM本部役員や地域で支援に動いた人々の意見をきいたが、印象的であったのは、この争議をとおして自分たちは変わったと断言する炭鉱地域の女性たちの活気と、もはや「合理化絶対反対」だけではすまされないという、NUMの本部で感じた重苦しい雰囲気であった。「合理化絶対反対・経営参加反対だったスカーギル書記長も微妙な路線修正を始めているのかもしれない」という私の話に、樋口さんは興味を示していた。本当はもつと議論を深めるべき点であったと思う。要するに、中曽根行政改革支持の世論が広がり、それに呼応する民間単産のリーダーたちの「民間先行」の戦線統一、「全民労協」の動きが活発化するなかで、樋口さんも「従来の左翼の常識」に寄りかかるとだけでは済まされないという危機感を深めていた、といえないであろうか。イギリス炭労の大敗北もまた、樋口さんに「転換」をせまる契機であったのかもしれない。

同時にいま一つ、樋口さんには、労働運動の陣形を変えていくことは不可能ではないはずだ、という確信が生まれはじめていたように思う。一九八八年の座談会で彼は次のように発言している。「われわれは今まで職場・生産点で頑張ってきたのだが、地域・生活の領域での闘いが欠落していた」という反省から、「なんと言っても、職場生産点とともに市民社会・地域社会・地域の社会運動

と結合しなければダメだという問題意識が強くあった。その当時首都圏の地域の運動で、一番元気がいいのが、生活クラブ生協であり、それがとりあえずのイメージで「労働組合と生活協同組合との結合等を……（一九八二年から八三年頃に）いつていた」。「私は一九五〇年後半に川崎で、生協運動の経験があったのですが、当時と比べて隔世の感……昔の生協のイメージとは全くというくらい変わり発展している。……戦前から当時までは生活協同組合＝兵糧・兵たん部、補助部隊論であった。が、一九七〇年代を経て、八〇年代の生協はまったく異質なもの（ではないかと）感じて、これとの結合の重要性を強く思った」

樋口さんが労働運動の「転換」を提唱した「第一の契機」はこれであったという。つまり、彼の提唱はその「転換」をになう主体についての具体的なイメージを伴うものであった。それは運動の現場の展開に注目し、そこから「未来」の芽を探すという調査なしには出来ないことである。ここに樋口さんのオルグ活動と調査活動の結びつきがあった、と考える。実際、この座談会で彼が整理した「第二の契機」は一九八四年頃に全日自労を母体にしてできた労働者協同組合に出かけて、「政治的党派の立場はちがっても……同じような思想と路線を追求している」と思ったこと、「第三の契機」は「ルーカス・プラン」の中心者、マイク・クーリーの話を書いて「われわれが経験したことのない素晴らしい運動だなあと思った」こと、日本の倒産反対の争議団の自主生産が「社会的に有用な生産・労働」を目指して労働者生産協同組合に発展できれば「危機の頂点にある労働運動の一つの転回軸になるのではないか」と考えたこと、「第四の契機」は国際協同組合のレイドロウ報告（西暦二〇〇〇年における協同組合）日本生活協同組合連合会発行、一九八〇年）を読んで「すごい衝撃を受けたこと」だと述べている。生活者に有害なもの、社会的に不要なものは扱うなという生活協同組合の方針

と、社会的に有用な物を生産するという「労働者プラン」は「一対になるのではないか」というのが彼の主張であった。

このように振り返ると、樋口さんが「ルーカス・プラン」に強い関心をもって、伊豆の隠屋にまで度々足を運んでこられたことの意味がよく理解できる。彼は一九九三年に「協同社会研究会」を立ち上げたが、その第四回研究会（七月一六日）で、私は樋口さんの依頼に応じて「ルーカス・プランとその後」について報告した。樋口さんは一九八〇年代前半からの「労働運動の根本的転換」の夢を追い続けたのではないが、それが彼の自主管理的な社会主義論の核心になっていたのではないかと、いうのが私の解釈である。

考えてみれば、樋口さんの「労働運動の根本的転換」に向けてのこの提唱は、アメリカのAFL-CIO中央指導部の画期的な交代が実現した一九九五年のほぼ一〇年前のことである。改めて、アメリカでのリーダーシップの交代を推進した「ニューボイス」グループの主張と樋口さんの提唱とを見比べてみると、かなりの部分で重なっていたことが分かる。その顕著な類似性と同時に両者の間の微妙な差異について、厳密な議論が必要なのかもしれない。

(9) 戸塚秀夫・兵衛剣・菊池光造・石田光男共著『現代イギリスの労使関係―自動車・鉄鋼産業の事例研究―上、下』（東大出版会、一九八七年、一九八八年）

(10) 前掲『労働運動の針路』のⅢに「労働運動の混迷と模索―イギリス」という題で収録されている。

(11) 樋口眞三『労働者解放を求めて四十年―労働運動と生協運動』（現代の理論）三三・三三・三三

(12) この支援カンパのキャンペーンで、学者たちは約百万円、「労働センター」は約六百万円を集めた。

それぞれ、わずか二週間のことである。当時、総評がこれにのりだせる状況ではなかった。「労研センター」は、総評顧問から外された元総評議長の岩井章、市川誠、太田篤達が立ち上げた組織であった。

- (13) 拙稿「イギリス炭鉱ストライキの跡を訪ねて（上、中、下）」（東大出版会「CE」一九八六年一月、二月、三月号）

- (14) 「労働組合と労働者生産協同組合——協同地域社会をめざして」というこの座談会には、石見尚（ルネサンス研究所代表）、宇津木とも子（ワーカース・コレクティブ・ニンジン理事、大和市議会議員）、寺岡郁（水と石けんから暮らしを考える松戸市民の会代表）ほか数氏が出席して、刺激的な意見を述べている。（「明日を拓く」特別号、一九八八年二月）

- (15) 全日自労の思想と運動を知る上で、中西五州「労働組合のロマン——苦悩する労働組合運動からのレポート」（労働旬報社、一九八六年）は必読文献であろう。

- (16) 先にふれた「イギリス労働運動の現状」報告に反応した全国組合は自治労であった。ヒラリー・ウェインライト、デイヴ・エリオット著、田澤雅文訳「ルークス・ブランシー「もう一つの社会」への労働者戦略」（緑風出版、一九八七年）が出版された直後に、自治労はクリーリー氏を日本に招待した。数箇所で開催会や研究会がもたれたが、樋口さんは東大で開催された講演会に参加した。そこには「代替技術の追求」に関心のある若い研究者、技術者たちとともに、自主生産争議を継続している現場のリーダーたちが参加していた。「社会的に有用な生産」のアイディアを生かそうとする「ワーカースコレクティブ調整センター」が発足したのは、その直後、一九八七年末である。その後の展開については、同センター報「労働者の対案戦略運動——社会的有用生産を求めて」（緑風出版、一九九五年）

を参照されたい。樋口さんはその本の最終章に、同センターの世話人として「労働組合・協同組合・社会主義——三位一体の新生と協同社会形成を」と題する論文を執筆している。

- (17) 当時の日本で「レイドロウ報告」が如何に注目されたかは、高橋芳郎、石見尚共編「協同社会の復権」（日本経済評論社、一九八五年）で知ることが出来る。

- (18) その報告はブックレット「協同社会」とは何か（協同社会研究会編、一九九五年）に収められている。それは清水慎三、石見尚、樋口篤三諸氏の報告と一緒に編集されている。これも樋口さんの戦略構想の表現であった。

- (19) AFL-CIOの中央指導部の交代に注目して、私は三つの翻訳プロジェクトに関わった。①ケレゴリー・マンツイオス編、戸塚秀夫監訳「新世紀の労働運動——アメリカの実験」（緑風出版、二〇〇一年）②ケント・ウオン編、戸塚秀夫・山崎精一監訳「アメリカ労働運動のニューボイス——立ち上がるマイノリティー、女性たち」（彩流社、二〇〇三年）③国際労働研究センター報告「社会運動ユニオンズ——アメリカの新しい労働運動」（緑風出版、二〇〇五年）など。私は①の解題「米労働運動の新しい波」の結びで、「結局、「社会運動ユニオンズ」とでも言うべきものに進んでいくことになる」と述べているが、その後の展開を踏まえた上で、樋口さんの提唱を吟味してみたいと考えている。

四 ◆「J.R. 総連聞き取り研究会」に参加して

最後に、——これが本当に樋口さんとの最後の出会いになってしまったのだが——二〇〇七年五月から

一月にかけて、旧国鉄動力車労組（以下、動労と略す）のトップリーダーであり、JR総連の最高幹部でもあった松崎明氏をかこむ「聞き取り研究会」が組織され、五回におよぶ密度の高いヒヤリング、意見交換が行われた。この研究会の意図とメンバー、研究会の経過、その聞き取りを手がかりに確かめた事実、そこから浮かび上がってくる論点などについては、かなり詳しい報告書が公刊されているのでここではふれない。ただ、この研究会に関する樋口さんの貢献、そこでの発言について、次の二点は証言しておきたい。

①樋口さんは、この研究会の発足について大きな役割をはたした。「試論」を受け取ったある友人から、このような「聞き取り」が可能になったのは何故か、「危険水域」を航行できたのは何故か、という感想を頂いたが、以下の「裏話」はそれに具体的に答えることになろう。

私は「国鉄労働者の解雇撤回」を掲げる二〇〇四年「二二・一全国集会」の「呼びかけ人」に加わって「国鉄闘争」へのコミットメントを公然化して以来、たびたび運動の進め方に関して樋口さんにアドバイスを求めている。それは「呼びかけ人」として動く中で、「国鉄闘争」を担うべき運動体の側に少なくとも二つの流れがあることを知り、その克服のための道を探っていたからである。樋口さんも当初は悲観的で、状況をうかがっている感じであった。だが、思いきって二〇〇五年二月に、このような「運動の立ち遅れ」の原因の一つには「主体側の思想的な弱さ」「指導部の一部に根強いセクト主義、すでに破産した路線への固執」があるのではないか、という私見のある運動誌に投稿してから、事態は思いがけない展開となった。私見を読んだJR総連副委員長四茂野修氏から、「同意するところがあるので、出来れば会って話し合いたい」という手紙が私に届き、それを聞いた樋口さんが四茂野氏を連れて熱海に現れたのである。それはあのJR福知山線の重大事故が起きた同年四月二十五

日の午後のことであった。

私は当然、「呼びかけ人」として動いてきた当面の「国鉄闘争」にJR総連としても協力して貰えないか、と話した。丁度七月一五日の大集会の「呼びかけ人」として動き始めていた時期であった。これに対して、趣旨はよくわかるが、これまでの経緯があるので、組織として参加することは無理だ、個人として参加できるものに伝えることは出来るが、ということであった。それが率直な意見の交換の始まりであったが、やがて、何度か話し合ううちに、あの国鉄の分割・民営化の過程における国労や動労の取り組みについて、いま改めて検証するような作業が必要ではないか、ということが樋口さん、四茂野氏を含めての合意となった。その合意がベースになって「聞き取り研究会」が成立したのである。

だが、研究会がスタートするまでには、幾つかの契機が必要であった。何よりも、私自身に躊躇と不安があった。果たして官憲やマスコミに「過激派革マル」として追及されている旧動労のリーダー達が「聞き取り」に率直に応じしてくれるかどうか。かりに応じってくれたとしても、「反革マル」の党派から激しい反発をうけるのではないか。かなりの迷いがあった。それを吹っ切らせてくれたのが「横断左翼論」の樋口さんであり、背中を押してくれたのが山口孝氏であった。樋口さんはその後、「警察・検察の横暴を許さない連帯運動」（以下、「連帯運動」と略す）を立ち上げたのだが、それを進めていた中心の方々が「聞き取り研究会」に参加する、という形になった。このように振り返ると、樋口さんが「横断左翼論」を縦横に駆使していたことがわかる。恐るべき構想力と行動力を持つオルグであった。「聞き取り研究会」が始まる前に松崎氏に「挨拶」に出かけたのは、樋口さん始め、その後「連帯運動」で重要な役割を果たす方々であった。私が松崎氏に会うのは「聞き取り研究会」が

最初であった。樋口さんと西茂野氏の存在なくして、「聞き取り研究会」は成立しなかった。両氏は、研究会のすべてに出席し熱心に発言していた。

② 樋口さんは、この研究会が進む中で、過去の自分の誤った思い込みを認め、それは自己批判すると発言した。進行役をつとめた私は、当初、「革マルの親玉」と言われてきた松崎氏と樋口さんとの「決闘」が起きては大変なことになりかねない、と緊張していた。だが、それは全くの杞憂であった。松崎氏の絶妙な語り口と樋口さんの率直な発言で、実り豊かな研究会となった。

最後の研究会（二〇〇七年一月三日）で、参加者が感想をだしあったとき、樋口さんは次のように発言している。

「俺はこの勉強会は非常に勉強になりました。……俺は一九四九年の一〇万人国鉄首切りの時、下山・三鷹・松川事件のときに共産党のオルグだったんですよ。……松川事件というのは国鉄と東芝が意識的に狙われたわけですから、それ以来俺はやっぱ日本の労働運動を変えるためには何たつて国鉄と大金屋であるという意識が強烈に（あった）。……（だから）国労の動向と機関車労組から動労の過程というのは、俺なりに結構理解しているつもりだ。とくに機関車労組という組織が、御用組合だと俺は思ったのだけれども、六〇年安保の頃ガラッと変わっていく過程を驚きをもって見ていた。俺の合理化論なんかは動労の方針は相当影響を与えてくれた。……機械化と合理化に対する絶対反対論というのは、共産党はあそこまできわなかったですからね。新左翼でも言わなかった。

そういうのを見てきたけれど、今度の勉強会で……「貨物安定輸送宣言」というのは、なるほどと思った。俺がこれまでそう感じなかったのは何故だろうと考えてみると、やっぱり「松崎＝革マル＝動労」という先入感がずっとあって、なんてったって「革マルというのは嫌なところだな」というの

が、自分の経験から言ってもあった。その革マル・松崎がやることはおかしいのではないかというのが、ずっと下地にあったわけだな。それがあつたために、俺は相当事実（じじつ）に即してみえたつもりだけれども、やっぱりある種の全体像を見失っていたなというのを非常に感じたのが「貨物安定輸送宣言」の話ですね。……要するに「貨物安定輸送宣言」というのは、そしてその後の一貫した改革路線というのは労働プランの闘争だったのだなと俺は理解した。いろんなことが、紆余曲折、妥協とかいろいろあつたけれども、労働プランの具体化であつて、あれは非常にすぐれていたのではないかというのが俺の結論です。」

さらに樋口さんは、松崎明というリーダーの品性、イニシアチブの優秀性についてふれているが、与えられたスペースを既に相当こえてるので、ここでは省略する²⁰。私は「試論」のなかで、国鉄改革の過程での労働組合の歴史的な対応について、対立する潮流間のラウンド・テーブルを始められなか、と度々提唱してきた。「セクトの壁は壊しいかもしれないが努力に値する」というのが樋口さんのアドバイスであった。

(20) 拙著「試論 動力車組合運動の軌跡について―「JR総連聞き取り研究会」中間報告―」（国労労働研、二〇〇九年七月）

(21) 当時の私見「国鉄闘争・その現状を見て思うこと」という文章が雑誌「地域と労働運動」（二〇〇五年二月号）に掲載された。

(22) 山口氏は明治大学名誉教授。労働者の立場を尊重する革新的な会計学者として著名であるだけでなく、「国鉄闘争」の「呼びかけ人」たちが集まる「国鉄・JR問題懇談会」のメンバーであつた。後

がその懇談会の帰路で、「JR総連が『国鉄闘争』に連携してくれば革命的な力になるはずだ、ひどく非難されているが、私がやっている東京大空襲・戦災資料センターへの来訪者にはJR総連の組合員がとて多い。一体、JR総連はどんな組合なのか、調べられないだろうか」と話しかけてきた。それがきっかけで、同懇談会は四茂野氏を招いた。二〇〇六年六月九日、四茂野氏は「二〇四七名問題への考え方と国鉄民営化をめぐる対応の総括」と題するレジメペーパーを携えて現れ、丁寧な報告を行った。「労働の姿身」については、「路線転換への第一歩だった」と捉えるものであった。ただ、国鉄民営化問題への労働組合の対応は今も歴史的な総括をもとめられている、それは現在の問題に直結している、と本格的な調査と討論の必要性を説くものであった。私が「聞き取り研究会」の準備を始めたのは、それからである。

- (23) 研究会参加者の発言は「懇談会『国鉄改革』」を総括する一松崎氏からのヒアリングを終えて「われらのインタビュー」第五号（二〇〇七年二月）に掲載されている。なお、この懇談会には松崎氏は出席していない。

終わりに

以上が、同時代に生きた私の樋口体験である。かねて私は、労働運動についての事例調査の重要性を確信し、さまざまな事例報告を発表してきたが、それが運動の核心に迫るためには、運動体内部のキーパーソンとの信頼関係を確立することが決定的に重要であると考えてきた。キーパーソンとは、必ずしも運動組織体の長であるとは限らない。運動のなかにあつて、それを体系的に観察し、その体験を客観的に捉え返す加性をもつ「有機的知識人」(グラムシ)である。そういう人物との協働なく

して、「職業としての調査研究者」が運動を理解することはおそらく不可能に近い。間違いなく樋口さんは、私にとってそうした協働の機会を提供して下さった貴重なキーパーソンであった。

この証言は、私が如何に樋口さんから刺激を受けてきたかを自覚する機会となった。彼が提唱した「労働運動の根本的転換」の方向には共感するところが多い。しかしなお留保したい幾つかの点があることも事実である。それは、彼の到達点を示す最後の著書『社会運動の仁義・道徳—人間いかに生きるべきか』(同時代社、二〇〇八年)を読んで深まる樋口さんへの畏敬の念と同時に、果たして日本の民衆はこの教説をどのように受け止められるか、という不安が残ったことと関係している。道徳の巨人から学ぶという視点と同時に、ときに草の根の民衆の運動のなかに生まれる倫理への注目が大事ではないか。その種を拾い集め、育てていく視点も大事ではないか。

ともかく、樋口さんが投げかけてくれた問題について、まだ正面から投げ返せていない問題がいくつか残っているように思う。すでに編集部から割り当てられたスペースを相当に超過しているので、それは今後の課題と自覚して稿を閉じる。

(二〇一一年二月六日脱稿)

一大衆政治家の軌跡

松本礼二＝高橋良彦遺稿・追悼集

彩流社

に入り、党も大衆路線の下に消滅して行く道をあゆむ（そういう表現であったかどうか確かでないが、世界革命過程によって論じあった、と反論したところ、党は長期にわたり存在し指導するというようなやりとりとなつた。高橋さんはこの点にこだわった急先鋒だつた。しかし数日後（二日後だつたと思う）、工作員の方から、皆さんの主張が正しかったとし、とくに弁明の機会を作ってくれたことである。マルクス主義の原理論的には当然のことだつたのだが、文化大革命期の中で、世界の革命のために、というスローガンが満ちている中でのことであつた。

工作員諸氏が党の上級機関に問い合わせ討議した上での解答であつたと推測される。この点で高橋さんの視察は鋭く、食い下つた点でしたたかだつた。

高橋さんは見解を異にする活動家や党派の人々に対しながら、よく話し合えることのできる指導者でもあつた。党人でありながら、苦闘している組合活動家の心情と立場がわかり、また組合幹部に在る活動家のスタンスも考慮に入れて指導できる人だつたと思う。加えて市民活動に対する理解力はとりわけ豊かであつた。

この幅の広い資質が彼の天性であり、多くの人に親しまれたのではなからうか。

高橋さんと会い、接した時期の中で、彼は激動期にその優れた力が最も発揮され得たのではないかと私見するのである。運動の退潮期にも挫折せず運動を続ける勇気とその労働者の

確信が七〇年代への運動を創つたのであろう。病軀を背負つて革命運動に献身した人生の決断は他に学ぶべくもない。

松本礼二さんとの出会い

——「東大紛争」と「新左翼」調査のなかで——

戸塚 秀夫

私が松本礼二（高橋良彦）さんと出会つたのは、一九六八年から六九年にかけての、あの「東大紛争」がきっかけである。

当時、私は東大社会科学研究所に着任早々の教員であつたが、「紛争」が全学的な規模に拡大し長期化するにともなつて、平教員の一人として、「紛争」の解決にコミットすることになった。「われわれの提案」（六八・一〇・一八）「収拾案」についての意見（六八・一〇・二六）、「東京大学の危機に際して」（六八・一二・二七）など、「紛争」の過程で教員有志が発表した三つの文書の作成に、私は積極的に参加した。

それらの文書は、東京大学新聞研究所・東大紛争文書研究会編『東大紛争の記録』（日本評論社、一九六九年）に収められているが、そこに貫く一つの立場は、「紛争」の正しい解決のためには、「紛争」当事者の理性的な合意を生み出す努力を重ねる以外にはない、ということであつた。そのためには、

東大当局が権威主義的な態度をかえて、大学へのラディカルな批判を提起している運動体との「交渉」の席につかなければならない。私はそう考えていた。

私が松本さんと東大近辺の喫茶店で会つたのは、六八年暮のことである。私の考えを理解していた東大助手共闘の某君が、フントのリーガーである松本さんとの会見の機会をつくってくれたのである。フントについての私の知識はごく僅かであつたが、「新左翼」諸党派の影響下にある東大共闘との「交渉」の可能性を探るためには、この人に会つてみるのが適当である、というのが仲介者の判断であつた。

現われた松本さんは、もちろん、初対面であつたが、私の予想に反して甚だ気さくな人物であつた。結局、私の考え方が甘いことを知らされる結果になつたのだが、このままでは安田講堂への警官隊の導入が不可避となる、その事態を何とかして避けることはできないか、という私の憂慮を彼が真面

目に聞いてくれたことだけは確かである。そのうえで彼は次のようなことを語つたと記憶している。東大全共闘に「新左翼」諸党派がかかわっていることは事実だが、全共闘は特定党派のコントロール下にあるわけではない。諸党派のかかわりかたはさまざまであるが、フントとしては、東大闘争を七〇年安保闘争にいかに関与させていくかに最大の関心がある。「大学紛争」が「大学内の紛争」として解決される時期は過ぎた。だとすれば、彼が私との会見の際に出向いた真の意図はどこにあったのか。腕に落ちないものが残ったことは事実である。

だが、誤解をおそれずにいえば、私はこの松本さんとのインタビューをもって、私の「東大紛争」へのそれまでのかかわり方にピリオドを打った。そして、新たな調査研究の設計へとむかつていった。それが、日本における「新左翼」の調査である。その最終報告書は、戸塚・中西・兵藤・山本共著「日本における「新左翼」の労働運動（上・下）」（東京大学出版会、一九七七年）として刊行されている。

この調査は、当時の私にとっては、全く未知の領域にふみこんだ、大変スリルにとんだものであった。すでに警官隊との武装衝突をくり返している「新左翼」諸党派のリーダーたちが、こういう学術調査に協力してくれるものかどうか。リーダーたちとの面接自体、果して実現できるものかどうか。当初、私には成算はなかった。幸い、主要な諸党派のリーダーたちが面接に応じてくれたのであるが、その中の一人に松本

さんがいた。

松本さんとのかなり長い面接が行れたのは、一九七一年九月と一〇月の二回である。当時、すでにフントから除名されていたはずであるが、彼はそこで、二・一スト当時の電話局の青年部活動にはじまる彼の労働運動とのかかわりと、日本共産党の港地区委員であった彼がフントに加盟するにいたるいきさつを、極めて率直に語った。そして、フント内の論争についての鳥瞰図を与えてくれるとともに、フントの労働運動へのとりくみの代表的な事例を紹介してくれた。私がさきにもふれた調査で、「大阪中電マッセンストライキ」をとりあげたのは、松本さんのオリエンテーションによるところが大きい。「マッセンストライキ」にいたる運動の軌跡を記録し分析するに値いすると思った私のフィールド・ワークに、彼は支援を惜しまなかった。

「哲学的な範疇には弱いのだが」という台詞が彼の面接記録には度々あらわれる。それはあながち、質問する大学教員たちへの単なる煙幕だつたとはいききれないかもしれない。フントの「理論家」たちの論争を紹介する松本さんの話には、労働運動の実践家としての自負のにじんだ手堅いコメントがつけられていた。「僕などは実践活動家として育ってきたので、どうしてもリアルに問題をたてる。」というのであった。松本さんは、日本共産党を大衆追従的な議会主義政党とみなして離れ、フントに身を投じながらも、フント内部の観念的な論議にもあき足らず、大衆運動との接点を求めつづけてい

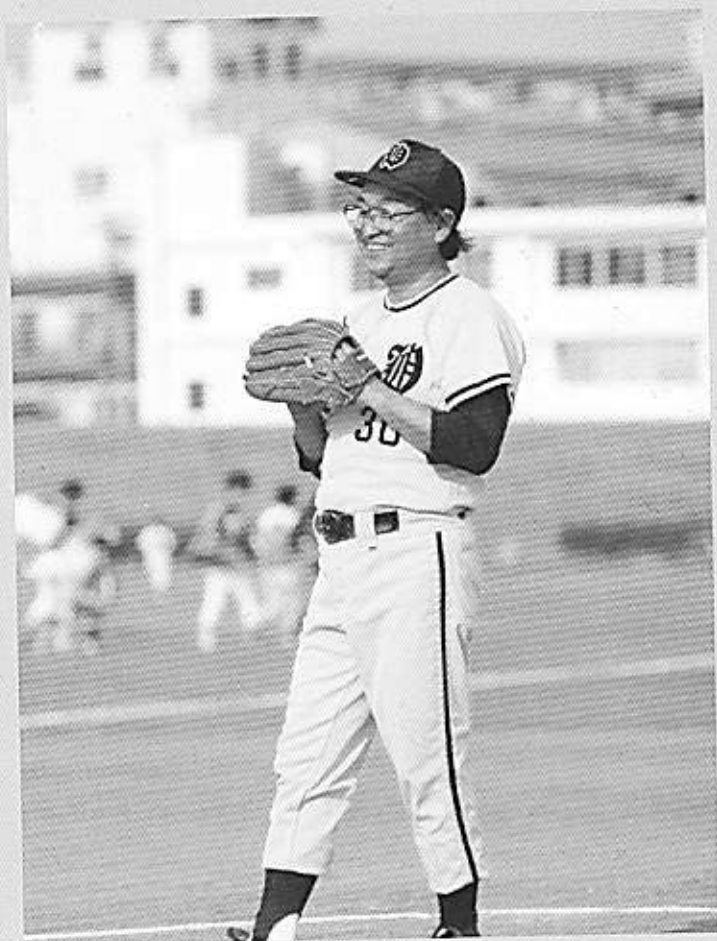
たように思われる。「統一戦線至上主義者と非難されようが、僕は目的を同じくする人々との統一行動を大事にする。」彼はそう語っていた。運動のためには泥をかぶっても悔いない。そんな雰囲気の際々面接であった。二度目の面接が終って肩を並べて歩いていったとき、サンダル履きの松本さんが、「実は今は病気がかかっていて、余りながくないと覚悟しているのです」と洩らしたことを覚えている。

そうしたイメージで松本さんという人物のすべてをどの程度理解したことになるのか。もちろん、私には自信はない。だが、自分たちの運動を他者の批判にもさらしながら、ともに道を求めようとする松本さんの柔軟な姿勢に私は好感をもった。私の運動事例調査研究では、その運動のただ中であつて委細を承知していながら、自らの体験を客観化して考えることに関心をもつ、開かれた心の実践家との出会いに助けられることが多いが、松本さんは私にとってそういう貴重な存在であった。

松本さんが保有していた文書資料は、私の研究室に移管され、「高橋良彦氏資料」として整理されている。合掌。

松崎 明

心優しき「鬼」の思い出



松崎明追悼集編集委員会

松崎明さんを想う

戸塚 秀夫

職業柄、かなり多くのユニオン・リーダーの方々と面接してきた私ですが、松崎さんとの面接は本当に忘れがたい記憶となりました。貴重な体験となりました。

最初にお会いしたのは、「国鉄改革」にいたる勤労の運動の軌跡を検証することを目標として、松崎さんを囲む「勉強会」(のちに「JR総連聞き取り研究会」と呼ばれた)がスタートした2007年5月24日のことでしたが、当時はなお、松崎さんは冤罪の被疑者として官憲に追及されている立場にありました。もしも松崎さんが逮捕されてしまえば、この「勉強会」は成り立たなくなる。果たしていつまで続けられるのか、また、この異常な状況におかれた当の松崎さんがどの程度協力して下さるか、全く自信なしに始まったのがこの面接の勉強会でした。参加者のなかには、樋口篤三氏をはじめ、それまで松崎さんと対立する立場にいた方もいましたから、進行役をつ

とめた私は当初は大変緊張しておりました。

だが、松崎さんはこの「勉強会」に全面的に協力して下さった。そして、そこから多くの重要な事実と論点が浮かび上がってきたのですが、それだけでなく、私はこの「勉強会」によって、面接調査が調査者達にもたらしうる影響、その可能性をすく意識することが出来ました。それは端的に言えば、面接調査のプロセスは、被面接者の「記憶の水脈」から面接者が重要視する情報を引き出していく過程であるだけでなく、面接者自身が自分の認識を変えていく契機をはらむものであり、被面接者の対応如何によつては、面接者が反省をせまられる契機をはらむものである、ということです。それを生々しく体験したのがこの「勉強会」の醍醐味でした。

もちろん、そのような可能性が実現するためには様々な条件が必要となるに違いあ

りません。面接者自身が真実の追究にどれほど真剣であるかどうか、被面接者がどれほど真面目に応答するかどうか、その面接が「外から」の監視や強制から自由な環境で行われるかどうか、など。あの「勉強会」の参加者たちは見事にその条件を満たしてくれたのですが、やはり決定的であったのは、松崎さんが発散する人間的な魅力、松崎さんの人柄そのものでした。無難な言葉を選ぶというよりは、むしろざつとばらんに自分の胸中をさらけ出す語り口。そこから伝わってくる不当な権威への抵抗の精神と実践のエピソードの数々。私は松崎さんの応答に魅了されました。

数回の「勉強会」が一段落したときの参加者達の「感想」が「われらのインター」(第5号)に掲載されていますが、そこには、「勉強会」がスタートした当初参加者の一部に漂っていた、いかがわしい「松崎＝革マル」という霧が晴れていく過程が率直に

語られています。実際、松崎さんはすべての研究会に出席し、私の不嫌なすべての質問に丁寧に答えてくださった。その誠実さ、忍耐力には頭が下がりました。深い感謝の念であの「勉強会」を想いおこします。

いまはまだ、突然のご逝去の報せに呆然としているのですが、時が経つにつれて、松崎さんに貴重な機会を与えていただいた研究者としてなすべきこと、ないうることは何か、と考える始めております。とりあえず、次の二つことを松崎さんにお約束したいと思います。

その一つは、「松崎＝革マル」に支配されたJR総連」という言説をもて遊んできた人々への根本的な批判です。私はあの「勉強会」を準備する過程で、松崎さんの著作がとて多いのに驚きました。しかもその大部分は、松崎さんが組合の会議など、公開の場でおこなったスピーチの速記録です。旧動労やJR総連への疑惑をもつのであれば、その記録類に目を通すことが不可欠の作業になるはず。それをしたのかどうか。JR総連の資料室には、組合の内務運営に関する資料が見事に整理され、保

管されています。真実を確かめる気持ちさえあれば、沢山の吟味すべき資料がそこにある。その地道な作業をすることなしに、公安警察の提供するデータに飛びつきの研究の蓄積を知るものとして、到底許すことができないのです。

さらにいま一つ、「試論——労働組合運動の軌跡について」（国際労働総研、2009年）で度々触れたように、あの「勉強会」の作業は、動労・JR総連の流れとは異なる潮流の中にある方々との対話に向かうための一里塚にしたい、と考えてきました。「試論」の最後で私は次のように述べています。

「すでに国鉄労働運動は、全体として、大敗北を喫したのである。それは、国労の方々にとっては動かしがたい事実であろう。あの嵐をたくみに乗り切った動労の方々にとつても、喜んでいられるだけでは済まされない現実が展開しているのではない。この過程を正確に記録し、「失敗」の諸原因とともに「成功」にともなう抱え込んだ諸問題を深く考える必要があると思

う。そこから、未来に向けての協同が始まるのではないかと期待している。」

決して容易ではないかもしれないが、異なる潮流間で歴史認識を交換し、共有できる部分を積み重ねていく努力を諦めてはならない。微力ですが私もそれに役立つような仕事を続けたいと考えています。

松崎さんとの出会いから、私は沢山の刺激をうけました。あの「勉強会」で「松崎さんというリーダーが何故でてきたのか」という声が出たことを覚えています。本格的なユニオン・リーダーの研究が弱い日本の学界状況を思い出させるコメントでした。実際、この傑出したリーダーの特質はどこにあるのか、それを生み出したものは何か、逆境にあつてもそのリーダーを支えたものはなにか等、他にも多くの宿題を意識していますので、これからの仕事のなかでお付き合いさせて頂くつもりです。本当に有難うございました。

（2011年2月12日）